

# 希望とその可能性－主観的願望から確かな希望へ－

近藤良樹

## 1. 喜望峰

アメリカは、近年にいたるまで、多くのひとびとのほらかな「希望の大地」でありつづけたが、この大地に向けて一番早く「希望」を託したのはイザベラ女王（スペイン）であった。コロンブスは、西航してインド（＝インディアスは当時東アジア全般を指したとのこと）へという自分の計画をまずポルトガルに申し出たが、断られて、これをイザベラ女王に向け、やがて彼女に受け入れられ、大西洋を西に横断するインドへの冒険の航海を行った。イザベラ女王は、コロンブスに、インド（アメリカ）行き大きな希望を託すことになった。中東を介するのではなく、大西洋から直接にインド（東洋）へという「願望」は、当時大きくなっていった。だが、インド行きの願望は、願望としては、「行きたい」という漠とした願いにとどまって具体性を欠き、方向すらさだまらない望みでは、船を港から出すわけにはいかなかった。

単なる「願望」とちがって「希望」は、現実へと降り立ち具体化した願い・望みであって、これは、実現されうることをふまえたものである。コロンブスは、インド（東アジアでも、黄金の島ジパング＝日本がかれの夢だったとか・・・）に行きたいと単なる願望をのべたのではなく、具体的に、西に進むとインドに行けることを説き、イザベラは、これに納得し、その実現可能性にかけ、財政的な支えを行った。インド行きは、コロンブスが出航してからは、彼自身においてはもちろん、イザベラにおいても、もはや単なる願望にはとどまっていなかった。具体的な希望となった。

願望は、主観的なものにとどまり、現実のなかで具体化されなくてもよい。場合によっては現実には不可能なことを、過去の変更不可能なことすらも願望としてかまわない。だが、希望は、現実的な可能性をふまえていられるものであり、現実には不可能なことは、失望や絶望とはなっても希望となることはありえない。願望は、希望となるには、現実的になるように具体化される必要がある。

同じころ、大西洋を通過してのインド行きを競争し優位にたっていたポルトガルは、南下して着実にインドへと海路を進んでいた。だが、ポルトガルの試みをさまたげるように、アフリカは、はるかな南にまでつづいていた。かれらは、途中で失望し絶望したことであろう。だが、そのときも、インド行きの願望自体は持続させていたはずである。もし、願望がなくなっていたとすると、つまり絶たれる望み自体がないのであれば、落胆して絶望的になることはないのである。

その願望の持続と失望・絶望がつづいていたなかで、東にまわってインドに行ける確かな可能性がふたたび意識されたとき、希望は、よみがえった。それが「喜望峰」であった。しだいに絶望的にまでなっていたポルトガルにとって、インドに到達する現実的な可能性の見出せた岬だった（真のアフリカの南端は、もうすこし東南東にある「アグラス岬」のようであるが・・・）。その発見（1488年）後まもなく、インド（はカリカット）に到達しており（1498年）、この間に、ポルトガル国王（ジョアン二世王、あるいは次のマヌエル一世王か）が *cabo da boa esperança* (cape of good hope 善き希望の岬) と命名したといわれている。時間の前後関係で微妙なところであろうが、或いはイザベラ女王のコロンブスがインドに到達した（1492年）と聞いて、思いもしない方向からさきを越され絶望的になっていたそのあとの王の命名かもしれない。はじめは別の名（嵐岬 *cabo tormentoso*）をつけていたのを王は「喜望峰」（日本では、希望は、常に喜で、悲でも悪でもないから、「喜望」は、ふつうではないし、岬だから、「峰」というのも、おかしいのだが、なぜかこう表記することになっている）と改めたという。いずれにせよ、インドに行ける可能性の復活に大喜びし、王は、希望をよみがえらせ、そのよろこびの大きさを「喜望峰」の「喜」に付したのであろう。

（希望は、実在的な可能性をふまえる）希望は、単なる願望や夢とちがいで、実現されることを踏まえて抱かれる。希望の対象・目的となるものは、現実において個別具体化され、実現のための客観的な可能性をもつものになっていなくてはならない。「喜望峰」は、まちがいに東に周航できる場所を見つけて、そう名づけたのである。コロンブスの場合もイザベラ女王（スペイン）の希望は、ポルトガルのアフリカ西海岸南下の航路独占という事態を

ふまえて、西方向へという新航路に限定し、現にコロンブスが出航して、真に可能となったものであろう。

実現可能なものをひとは、希望する。それは、いまだ存在しない未来の価値あるものであるが、単なる夢とはちがい実現できる理想である。実現可能なものとして、希望は、実在化への客観的な整合性をもち、具体性・合理性を有しているのだからではない。

E. ブロッホ『希望の原理』は、精神文化のうちに見出される希望に関する多彩な事例を取り上げているが、原理的な概念規定にもところどころで触れる。同書は、希望を、「実在的に可能なものをもって媒介された希望」<sup>1)</sup>と捉え、希望には「論理的具体的修正と先鋭化 logisch-konkrete Berichtigung und Schaerfung」<sup>2)</sup>の能力があると見ている。希望は、その現実をよく見ている、その希望達成へと展開する現実のその論理・法則をふまえて、これを的確に追い、希望にいたる手段はもとより、その目的すらも修正して、事柄の実現へとこれを先鋭化していく。インド（アメリカ）へ向かったコロンブスのスペインにしても、喜望峰からインドに向かったポルトガルにしても、幾度もその希望に修正を加えながら、未来へ、インド（ジパングのある東洋）へ、アメリカへと突き進んでいったのである。

（希望の構造—その手段と目的）日本語では「希望」は、「a（W）を、Pに、希望する」と、直接目的語も間接目的語も取り、誰か（P）に、希望の目的（a（W））を希い望むという形式をとる。希望の目的a（W）、即ちWをaすることを希（こいねが）うのであるが、普通そのWは価値ある物なので、「PにWを希望する」と、Wを希望の直接目的語にすることが多い。しかし、厳密には、aつまり「Wを獲得する」「Wに自分になる」ということが目的である。Wが反価値物（汚物や不幸あるいは死刑等）の場合は、これが希望の目的になることはありえず、ここではaは、「排除する」「停止する」等となり、厳密にいうと、aが希望の目的になる。とはいえ、普通は、価値物Wを「得る」、憧れのWに「なる」のであり、その「なる」「得る」は、自明なので、省略して、「Wを希望する」という。このWを目的にあげて、それに向けて、希望は、燃えるのである（希望のこの「a（W）をPに希望する」構造については、拙稿「希望とは—希い望むこと—」（『広島大学大学院

文学研究科論集』第67巻2007年)を参照ください)。

希望は、この未だ無い未来の目標 (a (W)) を可能とする現在の出発点を見出して、その歩みを一步一步たどる。a への歩みは、単純ではないのが普通である。未来に向けての諸手段・諸媒介となる。「裁判官」(正確には、裁判官 (W) に任官する (a) という、a (W)) を希望に描きあげたものは、そのために司法試験に合格することを考え、それには、法学部で勉強することが必要と思い、いまの高校生として文科系の受験勉強に力を尽くすのである。未来の目的からさかのぼって、諸過程・手段を手もとの現在まで描いて、この現在をしっかりとつかまえ、はるか先の目的にむけて一步を踏み出すのである。願望や夢なら、即その日に「裁判官」になる。だが、希望は、客観的で現実的であり、裁判官になるという人生のはるかな目標を立てて、その遠大な希望達成までの実在的に可能なプロセスを描きだす。

夢・願望と違って希望する者は、実在的にその希望実現のプロセスの中に降り立つ。その希望達成の可能性は小さくてもよい。それでも、(現実的には何もしない) 単なる夢とちがいで、裁判官になる希望をもつ者は、実際にそのための勉強を始めるのであり、その実践的取り組みにおいて、希望の実在的可能性を獲得する。あとは、この可能性を高めることである。希望は、ブロッホのいうように、「客観的実在的可能性 *objektiv-reale Moeglichkeit*」<sup>3)</sup>であり、ひとは、機に応じてこの可能性を高めながら希望を現実化していくのである。

## 2. 許容の可能性—自己の分を心得て希望する—

(何を望んでよいのか。自分の分限を知る) その希望 (a (W)) がなにかの取得・享受になるとしても、それが自分勝手な要求とちがって「希望」であるのは、これを担ってくれている者 (P) に配慮して、その自主性を尊重しながら、これにお願いする姿勢をもつからであろう。相手を慮ることなく一方的に賃上げとかサービスを「要求する」のとちがいで、「希望する」者は、相手への慮りをもつ。自分の分限を越えることがないように配慮しながら、可能なものを理解してもらい希 (こいねが) うのである。

希望は、一番の欲求対象を目標とし目指すが、単に最高のものなのではな

い。宝石店に行って、希望の宝石を購入する場合、1億円のダイヤを垂涎の的とながめても、これを希望とはしない。希望の品は、1万円前後の真珠である。その真珠で気に入ったものがあるとき、「希望のもの」があったという。最高の客観的価値のある欲しいものが希望ではなく、自分の購入能力を、つまり実現可能性をふまえ、あるいはそれを願える相手（P）へ「希（こいねが）い」「望み」うる物をはかって、これを希望するのである。希望は、おのれの分を心得て、つつまじやかである。

（希望（けもう）から希望へー希有の望み）ヨーロッパの希望(hope, espoir)は、キリスト教の高い神学的な徳目としての希望(spes)のもとにあつて、ふつうには悪い意味合いでは使われない。それでもスピノザは希望(spes)を悪とみなしたし、ギリシャ神話でも、いまにポピュラーなパンドラの（災いの詰め込まれた）箱に残った希望(elpis)の話では、希望は、災いとの評価である（ただし、「希望」だけは箱に残りこの世には出てこなかったとか・・・この話に囚われた者はその解釈に悩まされることになる）。これに対して、わが国の場合は、希望は、この漢字自身は、かつては悪い意味で使われるのが一般的だったようである。漢訳仏経典『仏説無量寿経』に、「常懷盜心 稀望他利」（常に盗心を懷きて、他の利を稀望す）<sup>4)</sup>「悪逆天地 而於其中 稀望僥倖 欲求長生」（天地に悪逆して、そのなかにおいて、僥倖を稀望し、長生を欲求）<sup>5)</sup>という。希（稀）望は、否定されるべき欲望・願望の意味で言われている。一遍上人は、「世間の希望たえずして」<sup>6)</sup>とか「三界六道の中に希望する所」<sup>7)</sup>と言い、希望は、煩惱扱である。

中世の「希望（稀望）」は、「けもう」とよまれ、単に「希い望み」求めることではなく、「希」有の大それた願望・欲「望」を意味していたようである。現在の「希望」とちがい否定的な扱いだが、日本の現在の希望の特性の一端は、この「けもう」に示されているように思われる。それは、ひとつには、希望は、自身にとって希有の高い価値あるものだという主観的評価の点である。さきの『無量寿経』の「稀望」は「僥倖」という希有の幸運を求めたものであった。一遍は、空也上人の言葉を引きながら、功を積んで善を修すると「希望多し」<sup>8)</sup>ともいう。自分の積んだ功德に応じた高い希有の望みをもってしまふということである。現代の希望も、希有の高い価値あるもの

を望む。

中世のこれらの希望は、唾棄すべきものの扱いであるが、その卑下の点でも、現在の希望につながるものを見ることができる。『無量寿経』では、「盗心を懐く」ことが「希望」に等しいものとして並べられた。鴨長明『発心集』は、ひとの「希望深き事」をいい、それを「心うき食欲のふかさ」と言い換えてもいる<sup>9)</sup>。希望は、大それた情けない食欲だと恥じる。それはおのれ自身の希望であれば、当然、野卑で食欲な身のほど知らずの自分でという厳しい自己否定になる。この自己卑下の精神自体は、現代の、ひとに希う謙虚な希望につらなるものであろう。希望は、だれかに託すことが多く、その相手を慮りつつお願いするが、その配慮する精神は、自分を卑下し、相手を尊重し遠慮するところに顕著にでてくる。「大それた夢です」という中世の「けもう」の（自己）卑下の精神は、今につづいていると言えそうである。

その中身をあらためると、『無量寿経』のいう「天地に悪逆してそのなかにおいて僥倖を希望し、長生を欲求し」「常に盗心を懐きて他の利を希望す」は、現代人の希望そのものである。現代人は、そのいう「けもう（希望）」の生き方を恥じることなく、むしろ、大それた自己主張をし、富みを誇り大量消費を賛美さえする。合法的ならひとのものの略奪も恥じるようになってきている。現代の希望は、少なくないものが、「けもう」である。

（希望は美德である）現代という時代そのものは、大量生産・大量消費を肯定していて尊大で「希望（けもう）」に浸っているのだとしても、個人的な心情においては、そのことを大それた食欲などと感じてはいない。中世の日本では否定され卑下された「希望（けもう）」は、ごく自然の世俗の事柄とされ、肯定される「希望」となっている。しかも、他者に配慮し穏やかに「希う」ものとして、希望は、かなりの美德扱いである。希望という姿勢は、現代では常に善的であって、悪と自らの思うようなものは、決して希望とはしない。各自の希望は、真摯である。

希望は、希うものとして控え目である。希望する者は、「遠慮」（はるかな慮り）をもち、周囲・他者をふまえていただくものとして、自身の希望について、恥ずかしくないものだとの自己了解をもつ。一方的な要求なのではなく、「希う」のであり、相手や周囲に頼んで、自他に了承しうる穏やかなものが

希望の内容になる。希望の関与者に十分な配慮をしての、合理的で節度をもった求めが希望である。関与者の自主性を尊重し、かれらの拒否、その希望の不達成にも配慮している。どんな卑近なものであっても、希望は、謙譲・遠慮の道徳をもったものになる。

希望には、理念型として、ささいで卑近な希望と、はるかな根源的希望をあげてよいのではないかと筆者は思うが、いずれも善である（両方の希望の違いは、その否定において顕著となる。ささいな希望が否定されてもせいぜい失望する程度であるが、はるかな希望の否定は、絶望など深刻なものになる）。ささいな希望、たとえば、「明日の朝食の希望」は、それ自体は単なる選択であって、倫理的に善というべき内容をもたないが、それでも、やはり、倫理的な心性に発する。つまり、単に選択するというだけではなく、食事を用意する者へ配慮し「こいねがう」という姿勢をもつのである。他方、はるかな希望は、自分でこの希望＝目的をかかげて、これに生きることになり、そのひとが何者であるかは、しばしば、そのはるかな根源的希望がなにであるかによって決まる。裁判官になる希望をもっているから、その現在が法学部生となっているのである。かけがえのないおのれの人生とその希望には、いいかげんな態度はとれない。自身にとって誇らしいものが根源的ではるかな希望となろう。倫理的に高邁な姿勢をその希望はもっていると言える。かつ、自主独立の精神のもとに自身でそう生きるのだとしても、希望は、単にひとりで「志す」「志願する」のところが、「希う」姿勢をもって、周囲に配慮し謙虚である。ひとりでするのだとしても、周囲に「自分だけで好き勝手を許してほしい、見守ってほしい」と言っているのであり、慮りに富む。

国と時代によって、希望は、その評価とその意味内容を異にするが、いまの日本人の希望を定義するとしたら、つぎのようにまとめられるのではないか。希望とは、「自身にとって現実的に可能な高い（しばしば希有の）価値のある人間的営為（あるいは価値物）について、これを実現したいと、ひとりに頼み希い、自らもそのために努力し求め望みつつけること」であると。

### 3. 希うことのできる客観的可能性

（ひとが変えうる、自由の可能性） 実現の可能性があれば希望できるが、

その可能性には、人が関与でき、自由にできる面がなくてはならない。狭義の（日本語の）希望は、傍観的な期待などちがひ、実践的で主体的なものである。ひとの関与をこぼむ自然の過程には希望はもたないように思われる。「明朝も太陽が昇ること」を希望する現代人はいない。まちがいなく実現されるもの、つまりは必然的と判断されるものは、人為であっても希望の対象からは外される。夕食にラーメンを作っているのを見ながら、これを希望することはない。仮に希望をその場面で言ったとすると、それは、「本物のラーメンを作れ」と言って、現につくっているラーメンを拒否していることになる。必然的にことが展開するものについては、もはや、「希い望む」ことは、不要・無用であり、それは、希望の対象からは外される。希望は、人為をもってする自由の可能性のもとにある。

さらにはそれが人間の制御できない偶然性のもとにあるものも、厳密には希望の対象とはしないのではないか。希望は、能動的に実現していくもので、自身や周囲の者が関与でき自由にできるものを、乞い願い、望み求めるのである。ひとが一切関与できないもの、まったくの偶然にとどまるものは、必然のものや不可能なものと同様に、願望や期待の対象とはなっても、希望の対象にはならないであろう。「あすの晴れ」を「期待」はできるが、「希望」することはできない（英米では、天候を自在にできるわけでもなからうが、「晴れ」を hope（望む）できる）。

純粹に偶然性からなる「宝くじ」は、当りの3億円を「期待」したり、「夢見る」ことはあっても、これを「希望する」ひとは、いない。希望は、自他の主体的な努力で、目標とする希望を能動的に実現していこうとする実践的なものである。まったく偶然にとどまり、一切の実践的関与が無効だと分かっているものには、希望は、もたないというべきではないか。偶然性の賭け事、宝くじへの参加は希望できるが、それは、宝くじを買うことが、買わないことも可能な自由のもとにあるからである。だが、3億円の当りを希望することはできない。

（高い（希有の）価値あるものの創造可能性）希望の対象は、ひとの自由な営為のもとにあるが、希な望みとしては、月並みの営為ではない。希望は、「希」有の価値あるものへの「望」みである。しかも、それは、単なる希有



の最高の価値ではなく、手の届く、実現可能性のあるものに限定された最高のものである。一方では、ひとに希う希望であるから、客観的価値秩序のもとで自身に許される最高の限度がどこにあるのかを踏まえ、他方では、個人的な好みとしての主観的な価値秩序における最高のものをはかって、これを希い望み求めることになる。入試での希望の高校や大学は、学費など他のことを考慮する必要がなければ、自身の個人的な志向、専攻したいものと、模擬試験等での客観的評価をふまえて選び出される。自身にとって現実的に可能な最高の、いわば希有の価値あるもの（その人間的営為）が希望の対象・目的となる。

未来に目を向けた希望は、高い（希有の）価値あるものを無から創造していく。求めるその目的は、未来にあり、いまは、それが無い。ただし、その未来の希望への可能性は現にある。その未来の目的が現在からみて達成可能であれば、その可能性はいくら小さくても希望はできる。その展開が不可能でなければ、これを試み、その実現の方向へと可能性を高めていくことができる。希望は、無を有と化す創造的な可能性のもとにある。もし今が無でなく有か有に近ければ、希望は不要である。婚約したら「結婚の希望」は無い。それが無でしかないところで「結婚の希望」は成り立つ。ブロッホは、「未だ無い Noch-Nicht」「新規のもの Novum」<sup>10)</sup>の規定をもって希望をとらえるが、この無は、明るい新規の未来に向かって開かれた「まだ無い」無であって、「もう無い」有り得ない無とはちがう。それは、（希有の）高い価値あるものを生み出す無であり、ひとをひきつけ駆り立てていく未来の新規のものの可能性である。現在のその無は、実在的な無であり、観念的には、つまり、希望のめざす目標・目的としては、それはしっかりと希望主体のうちに存在してその現在を方向づけている。希望の達成、その創造は、この未来の新規の観念とその（現在における）無を、実在化し有化することである。ブロッホは、「いまだ生成していない可能性への志向」<sup>11)</sup>が希望であると規定する。希望は、現実的にはいまだ無い新規の可能性、希有の価値をもつその可能性を現実化し有らしめていく、「無」から「有」への「生成 Werden」である。

（目的論的可能性）「希望」の可能性は、目的論的可能性である。「期待」

は、その基本は、因を踏まえ、そこに期待するもの＝果の可能性を見るだけの因果論的可能性のもとにあるが、希望は、はるかな未来の目的に可能性を見出す。期待は、いますでに存在しているもの（因）をもって、すぐ先に同じ存在が顕在化することを見る、いわば有から有への単純な展開である。犬は、えさのにおい（因）がすると、食事（果）を期待して尻尾をふる。だが、われわれは、犬には希望をいわない。希望は、人間のみがその生の基本形式とする、高度な目的論的営みである。希望は、希有の価値ある未来の目的を観念に描き、それが現在は無であるからこの無を有化しようと、現在に手段（因）を見出し、未来の目的の実現（果）へと実在的な歩みを進める、目的論的で創造的な可能性のもとにある。もちろん、単なる願望とちがって、その未来の目的＝希望の糸は、細々とでもこの現在にまで連綿とつながっていて、現在において可能となっているのであって、希望する者は、その未来（目的）と現在（手段）をしっかりと把握している。

身近なささいな希望でも、この目的論的姿勢は、明確であり、期待の因果論的姿勢とは区別される。あすの朝食に洋食を希望するのと、これを期待する姿勢は異なる。期待するものは、すぐさきに結果を見ていて、それをさきどりした心身の態勢をつくるから、朝の洋食の「ジャム」を思って口内には唾液を出すことになる。だが、希望は、明朝の洋食を選択するのみで冷静である。目的としての洋食とそれに到る過程（手段）を見通しながら、心身は目的とは距離をとって、その手段の現在に反応するのみであり、「じゃ、今夜は、和食にしておくかな」と現在を固める。

「みにくいアヒルの子」は、未来の白鳥（＝目的）という希望のもとにあった。白鳥でない現在はそれの無であり醜い存在だが、白鳥という希望は、その無に耐えさせる。希望は、その現在を手段とし犠牲としながら、これをかなたの理想・白鳥へと飛翔させていくのである。期待は、現に有るもの（根拠・因）から、その顕在化することを読むのみで、大きな「アヒルの子」のさきには、「おいしそうな北京ダック」を期待するだけである。

（リスク・賭けとしての可能性）希望は、未来にあり、その目指すものが実現できる保障はない。つねに不確定の部分を残す。自身実現に努力するし、周囲もその援助をしてくれるとしても、実現されるかどうかは、分からない。

賭ける以外ない部分が残る。

賭けるというと、「信じる」ところにも、不可知のものを信じるのだから（知りえたものは信じる必要がない）、賭けるということが出てくる。信では、その対象（情報）について、常に疑いの余地を残しているが、懐疑を停止して、これを真実とみなして受け入れ、これに賭ける。希望も、未来の希望の内容が実現できるかどうかは、未来のことだし不定であるが、これが実現できると賭けるのである。

ただし、信の場合、真実である確率は、高い。その裏づけ、真実であることの根拠は、十分なものをもっている。そうでない場合は信じることはできない。これに対して、希望の場合は、それが実現される可能性は、かならずしも高くなくてもいい。高くないどころか、不可能でなければ、可能として希望することができる。希望の実現は未来のかなたにある。信じることが、知るという認識上の問題であるのに対して、希望は、意志するもので実践的であり、みずからがその希望を実現していこうとする。実現が不可能と阻止されているのでなければ、その実現の可能性はひくくても、可能性は残っている。これに賭けることは無意味ではない。災害でのひとの救出など、生存の可能性は低くても、救出の希望を捨てず尽力する。生存している状態で救出される可能性はひくくても、その可能性があるかぎり、これをあきらめず、希望を失わず、希望を現実のものにしようと必死になる。希望は、わずかでも、その可能性があるかぎり、あきらめることはない。

「賭ける」のは、そのことが確実でないものについて、これを確実と見なして、そうならない場合のリスクを承知してひきうけ、あとはその成り行きに任せ受け入れることであろう。信じる賭けは、それが虚偽である場合のリスクを背負う覚悟をすることにある。希望の場合、その希望の実現は困難なことが少なくない。はるかな未来のことであれば、分かっているリスク以外の未知の危険のまにかまえている可能性もある。希望は、大きな賭けとなる。だが、信とちがって、それらのリスクを自身でへらすことができる。希望実現への意欲を高め、リスクを避け、これを乗り越えて、その方向を希望実現の可能性を高める方に向けかえることもできる。

#### 4. 自らが叶えていく主体的可能性

(意欲すれば、可能となる) 不可能でなければ、希望することが可能である。極端をいえば、矛盾なく現実の中でことを始めていくことができるものならば、なんでも可能で、希望できるということである。キルケゴールは、絶望を分析するに際してそういう希望を「憧憬可能性」と言って批判的にとりあげた。その著『死に至る病』は、絶望を死病と捉え、絶望の諸相を論じるが、そこでは絶望の反対である「希望 Haab」については、これを「可能性 Mulighed」という規定のもとにとらえる。キリスト教の根本思想になる天国への希望について、「救済の可能性」を「希望する haabe」ものといい、「可能性」としてこれを論じる<sup>12)</sup>。そして、世俗における軽薄な希望を批判して、深く考えず始めれば、どんなことでもさしあたりは可能で、そういう単なる可能性に留まり続けるものとして「憧憬」の希望をいう。幸福の青い鳥をさがしてどこまでもかなたへその可能性を求め憧憬して (ønske (=ask, wish))、求めることを得ない「憧憬可能性 Ønskets Mulighed」<sup>13)</sup>としての希望である。

キルケゴールは、否定的に論じているのであるが、希望は、本来、「憧憬可能性」のもとにあると言っていいのではないか。絶望から希望への歩みは、不可能という0%を若干超えた(実在的な)可能性にはじまる。その0%をわずかに超えただけの可能性をつくるのは、現実の中に降り立って希望するという意志である。絶望(可能性0%)の闇夜にしながら、空を見上げて一点の星を見つけるのが、希望のはじまりである。闇夜にいることは、同じである。ちがいは、はるかなかなたに、小さくかすかな、しかし輝くもののあることを見出して、これを見上げるのかどうかという、主体性の有無にある(ただし、同じ絶望の闇夜でも、暗雲が覆っていたのでは星は見つけれない。星空になるのを待たねばならない)。

それを、現実的に実際に自身に引き受けるかどうかの違いである。これを引き受ければ、希望となり、可能となる。逆に、100%可能でも、希望しないものは、実現しない。「黒い頭髪を金髪にする希望」は、100%かなえられる。だが、希望しない限り、だれもそれを実現することはできない。希望は、これを意欲するかどうかという主体性の問題となる。ゼロに近い可

能性であれ、100%に近い可能性であれ、それが希望になるのは、これを引き受けるかどうかという主体の意欲しだいのことである。

(自他の参与で高められる可能性)「信じる」のは、真実として信じるのだが、その真実度を高めるためにと実践的に関与することはない。信は、知・認識の領域に属す。だが、希望は、希望するものを実現する実践であり、その意志である。無から有をつくり出すのである。真実(有)らしいものを真実(有)と見なすのみの傍観的な信ではなく、実在的に関与して無を有とし有を無としていく実践的なものである。未来に描かれた希望を実現する活動であり、その意欲である。その実現が阻止されて不可能になっているのであれば、その実現の可能性はある。単なる夢・願望の場合は、現実的には何もしないから永遠に夢に(現実的には不可能に)留まる。しかし、希望は、ちがう。実在的にその希望実現の過程に踏み込み、その実在的歩みを始めるのである。はじめはその可能性は0%に近くてもよい。可能性は、実践のなかで、これを高めていける。その機会があるたびに、希望の意志は、希望実現の方向を選択しその努力を重ねて、実現の可能性を高め、ついには、この希望を現実のものとし、そのゴールを得ることができる。

希望は、ひとの働きかけでその実現の仕方や方向を修正しながら、その可能性を高めていくことができる。これを希望する者自身で変えられるものなら自身でそうし、その関与者・担い手があってこれが変えてくれるのであれば、これに頼むことになる。希望は、多くは、この自他の両方にかかわり、自身が尽力し他者にこいねがって、これを実現していくのである。

自身で可能なものは自らで希望をかなえていくとしても、自分のみで目指す場合、それは、「志す」志望であり、希望とはいいいにくい。aを「志す」、「志望する」こととちがい、aの希望では、「aをPさんに希望する」のである。志す場合は、「Pさんに志す」とはいわない。他者に関係なく、これを実行する。だが、希望は、本来的に他者にかかわり、「Pさんに」ということとなる。希望は、それを実現するに際して、尽力してくれたり、許容してくれる誰かにかかわる。希望は、ひとりしてはならないのである。等身大の希望をいただくのであるが、その場合、自身の能力を測り自覚しているとともに、自身の周囲の関係者について、その希望に自分の場合どの程度参与し

てもらえるものかと測っている。家庭の資力の問題で、なくなく自身の進学  
の希望を断念する。いくら自身が能力とやる気があっても、周囲の事情から、  
進学希望は、取り下げざるをえないことがある。

英語の hope(望む)は広く、「希望」には限定されず、ひとりして自然に向  
かっても hope できるようであるが、単にひとりして望むことにはあまり倫  
理・道徳は関与しなくてもよさそうだから、倫理的な徳目としての「希望」  
は、日本の「希う」希望ほどのことはないとしても、周囲の者を気にする方  
向になりたつではないか。希望は、自分のもとにはない価値物を求めて他者  
に依頼・依存することもあり、周囲の者への配慮をふくんで成立するのがど  
こでも一般的ではないか。トマス・アキナスの『神学大全』の「希望 spes」  
論は、希望を高い徳目と位置づけ、これを「可能なもの possibile」のもと  
に捉え、その希望の可能性の実現について、自己とともに他者に負うことを  
指摘する。希望は、「われわれ自身により per nos ipsos」「他者達によって  
per alios」「二重に dupliciter」「可能」なのだと論じる<sup>14)</sup>。この自と他に  
よるという点は希望に肝要とみたのであろう、希望を論じるその「第十七問  
題」の「第四項」は、他者にどのように希望を希うことができるのかをテー  
マにしている。希望の目的(本稿にいう a (W))を「目的因 causa finalis」  
と規定し、それと対で希望の援助者(本稿でいう P)を「作動因 causa  
efficiens」と規定して、第一の援助者の神と、第二の援助者「人間 homo」  
をあげている<sup>15)</sup>。希望は、未来に向けて高い目的をかかげ、周囲のひとに  
これを希い、自らに意欲していく、高度に知的で社会的な営みである。

(**選択可能性**) 未来は、未定であり可能なものの方向は、ひとつに限定され  
てはいない。多くの可能性がある場合、すべてを求めることはできず、どれ  
かに限定することが必要となる。その価値の高さの他に、自力による実現可  
能の程度、希望をかなえてくれる他者の能力とそれを自分の希望にまわして  
もらえる程度、その欲しさの程度等、諸種のことを考慮しての、いわば総合  
点の一番高いものが第一に希望する対象として選ばれることになる。しかも、  
選択して終わるのではなく、そこからはじまるのが希望であるから、将来的  
な視点がおのおのについて加えられるのでもある。どうしてもダイヤが欲しい  
のであれば、それを希望として、自身の購買能力を飛躍的に伸ばす方向に

生を駆り立てることもできる。不可能でなければ、希望はできる。何を選択するかは、その主体しだいということが希望では大きい。絶望していても、どこかに、暗闇のなかに、かすかに瞬く星をやがて見出せる。

「選ぶ」とは、「捨てる」ことである。夢を断念するのもある。現実的希望として法学部を選んだものは、夢多いが就職のことを思って、文学部は断念したのかもしれない。ただし、いったんは捨てたとしても、希望の場合、そこから出発しただけなので、希望の道は変えられる。未来へと時間的に展開するなかで、その欲求の程度とこれをめぐる状況の変化によって、一番望ましい対象は、変わる。

同じように未来に向かっていても、信念・信条は、自らの生きる原理として不動のもので、いったん選んだら、そう簡単には変えられない。簡単に変わるようなものは、もはや信念ではなくなる。だが、希望は、いくらでも変えられる。希望は、かなたの多くの可能性のなかのひとつを選択しているのみであり、その横の希望の星の方が魅力的になったなら、その方向へと目を移しても差支えないことが多い。第一、希うのであって、相手に合わせて謙虚である。希望では菜食（主義）を望んでいても、ときに肉食にしても、菜食（主義）の希望は、希望である。家族が肉入りのカレーを食べるとき、信念のひとは、この肉を拒否するが、希望のひとは、「あすは、菜食にしたい」と希望しながら、穏やかに肉食につきあう。

## 5. 日本的希望としての「第一希望」

希望（選択）できる多くの可能性があるのだから、自分の欲求、他者の援助の程度、社会的環境等から総合評価して、一番のものを選択するとしても、その下に、第二に希望するものをもつこととなる。第一希望のあとに第二希望、第三希望がありうる。日本語では、文字通り、第二第三「希望」という。端的な希望、「希」有の最高の「望」みは、第一のもので、第二以下は、第一のものが叶うかぎり、希望とはならない。その点からいうと、第二（の最高の）希望は存在しないのではある。が、第一がだめなときには、そのつぎのものを希望としうるのであり、はじめから、第一のみでなく、第二第三の希望をいっておくことは、希望についての現実的対応である。第二第三のも

のは、希有の希望の代用だというのではなく、これらも自分にはもったいない希な望みに属することで、ありがたいものなのだとすることである。他者に参与してもらい、あるいは、これに依頼しての希望であれば、慮りに富む捉え方になる。

日本語では、いくつかの選択肢から一つを選ぶようなとき、いやな義務的なことがらですら、しばしば「第一希望」「第二希望」をいう。だが、英語では、そういう場合は、first choice（第一希望）と「選択 choice」であって、希望とはいわないようである。肝要なことはここでは確かに「選択」であるが、「希望」をもってすることで、当事者や周囲への気づかいを表明しているのである。大学受験では、A大学が「第一希望」で、B大学は「第二希望」というが、真に希望しているのは、「第一」のもののはずである。「第二希望」以下は、おそらく、「希う」ような「希望」ではない。「第三希望」などは、もう「失望」を越えて、「絶望」に近い「希望」となる。それでも、日本語では「希望」とする。第二希望以下は、本当は乞い求め高く望むようなものではないのだが、ものごとは自分の思い通りになるものではなく、これを自身の次善の「希望」としなくてはならないと、考えるのであろう。あるいは、受験の機会自体が恵まれたことで、与えられた恵みを、自身としては気は進まないけれども、謙虚に、ありがたい「希望」と見なして、第二以下も希望と表記して周囲に気を使っているのであろう。

日本語は、端的に自分の主張をするよりは、周囲に配慮して、相手の立場になってものごとを表現する傾向がつよい。第一人称が（Iとかi c h）ひとつしかない印欧語族とちがい、周囲に合わせて「俺」「ぼく」「わたくし」といい、「おとうさん」「先生」等と自らを表現する。その相手に配慮しての表現が、「希望」でも出てきているのであろう。いやなもの・義務的なものの選択においても、相手が好意的に提案してくれている場合、その気持ちに配慮して、そのよりましな選択を「第一希望」という。食事当番を朝するか、昼か、夜かと分担する場合、本当は、どれもいやだけれど義務的なことなのでと選択するとき、夕食当番が「第一希望です」という。選択させていること自体がありがたいことであり、「いやがっていませんよ」と自己を抑えて周囲に配慮した表現をするのであろう。



「希望退職」「希望者」も、ごく日本的な希望であろう。「希望退職」は、自分の主張の明快な表明を大切にする自尊の欧米では採りにくい表現であろう。こんなものは、当然、日本でも、みずからの望み求める「hope (希望)」ではありえない。これは、依願退職のように退職する者が個人的理由でやめるとき言うのではない。会社側が人員整理せざるをえない場面で、従業員に退職を求めるとき言われる。「希望退職」には、退職を表向き「希望」する者の、周囲への複雑で大きな思いやり・配慮がある。本心においては、退職を希望してなどいない。だが、ひとつには、雇用者側が苦境に陥って退職者を求めていることがあり、そこで強制的な指名解雇でなく、これを募っているということがあって、これには被雇用者としても応えるべきで、応募するに際して、「いやがってはいませんよ、自身の希望です」と気づかっていることがある。さらに、残る同僚に配慮して、「自分で希望するんだ、心配無用！」と言っているのでもある。そして、雇用者側は、その「希望」をよく理解しつつ、真に希望する者がいたらまずはそのひとからお願いしたいのはもちろんだが（これが希望退職の用語の出所であろう）、あまりいやでなければ、申し訳ないがと、その退職者の自尊心・尊厳にも配慮し、「自らが望んでのもの・希望だ」というその志をくみとり敬意を表して、なくなく「希望退職者」を募るのである。

「希望者」も、かならずしも、望んで喜んでというものにかぎらない。気乗りしない事柄（先の夕食当番など）であっても、それへの「応募者」を「希望者」とする。応募者がこの表現に違和感をいだかないのは、募集側や周囲に配慮して慎ましやかにのぞんでいることがあるからであろう。ただし、応募内容が苦労・犠牲の大きいもの場合は（例えば義勇兵）、これにあえて応じるのは、「希望」よりは「志願」というから、希望は、その点では、一応は望んでいるもののうちにあるのではあろう。もちろん、志願も、相手や周囲に配慮する必要があるれば、「心から望んでいることです」と「希望」をもってすることになる。日本の希望は、「希う」という契機を含み、おのれを低くして謙虚に構え、控え目に依頼する傾向が強く、周囲への慮り・気づかいに富むものになっていると言ってよいであろう。

## 註

- 1) Ernst Bloch; *Das Prinzip Hoffnung*. Bd. 1, Suhrkamp Verlag, 1970, S. 389.
- 2) Bloch; *ibid.* Bd. 1, S. 126.
- 3) Bloch; *ibid.* Bd. 1, S. 391.
- 4) 『仏説無量寿経』卷下 (『真宗聖典』法蔵館 昭和36年 97頁)
- 5) 『仏説無量寿経』卷下 (『同上書』104頁)
- 6) 『一遍上人語録』卷上 百利口語 (『日本古典文学大系83 仮名法語集』岩波書店 昭和51年 87頁)
- 7) 『一遍上人語録』卷下 一 (『同上書』121頁)
- 8) 『一遍上人語録』卷下 九九 (『同上書』151頁)
- 9) 鴨長明『菴心集』第三 (35)「證空律師希望深事」
- 10) Bloch; *ibid.* Bd. 1, S. 4f.
- 11) Bloch; *ibid.* Bd. 1, S. 5.
- 12) *Søren Kierkegaard Samlede Værker*. Bd. 15, Gyldendal, 1982, s. 125.
- 13) Kierkegaard; *ibid.* Bd. 15, s. 94.
- 14) Thomas Aquinas; *Summa Theologiae*. II-II, Q. 17, Art. 1.
- 15) Thomas Aquinas; *ibid.* II-II, Q. 17, Art. 4.

## **Die Hoffnung und die Moeglichkeit**

— vom subjektiven Wunsch zur sicheren Hoffnung —

**Yoshiki KONDO**

KI-BOU(Hoffnung) unterscheidet sich von GAN-BOU(subjektivem Wunsch). Auch eine in Wirklichkeit nicht realisierbare Sache und ein unveraenderbares Ereignis kann man sich wuenschen. Aber man kann nur auf die Sache hoffen, die mehr oder weniger in Wirklichkeit realisierbar ist. Wenn man dann feststellt, dass die gehoffte Sache doch nicht realisiert wird, wandelt sich die Hoffnung in SHITSU-BOU (Enttaeuschung) oder ZETSU-BOU (Verzweifelung) um.

KI-BOU und KI-TAI (Erwartung) sind auch nicht identisch. KI-BOU hat eine teleologische Eigenschaft. Eine Hoffnung entsteht, nur wenn man ein realisierbares Ziel feststellt und sich darum bemueht. Dagegen hat KI-TAI eine kausale Eigenschaft: d.h. man wartet einfach auf ein Ergebnis, ohne eine Aktion von sich aus zu ueben. Somit kann man in der Regel nicht auf die Sache hoffen, die von der Notwendigkeit bestimmt ist oder dem Zufall ueberlassen bleibt, weil sie voellig unabhaengig von der menschlichen Aktivitaet bzw. Bemuehung ist, die mit der Hoffnung der Realisierbarkeit ausgefuehrt ist.

KI-BOU ist eine Art der Tugend. Das Zeichen KI stellt KOINEGAU (bitten) dar. Das heisst, man bittet jemanden um irgendetwas mit einer bestimmten Hoffnung. Somit zeigt man Abstand, Respekt und Ruecksichtnahme ihm gegenueber. KI-BOU ist ein hoch tugendhafter psychischer Zustand der Menschheit.

(広島大学倫理学研究会『倫理学研究』第18巻 平成20年3月)